NEWS LETTER

Tenri University Sankokan Museum

NO.17

ニュースレター NO.17
天理大学附属天理参考館
発行日：2014. 9. 12
発　行：天理大学附属天理参考館
編　集：広報普及係

第 73 回企画展

台湾平埔族（へいほぞく）のものがたり
―歴史の流れと生活文化の記憶―

“台湾平埔族”日本人には馴染みないテーマかと思います。知られざるその魅力をお伝えするべく、ここでは概要と見所をご紹介しましょう。

台湾平埔族とは、古くから台湾西部の平野部に暮らしてきた先住民族の総称です。台湾は 17 世紀後半より清朝政府の統治を受けました。中国大陸から移住してきた漢民族の影響を受け、彼ら平埔族の独自の言葉や生活文化は大きく変容、または失うことになりました。この展覧会では 18 ～ 19 世紀の絵図、古地図、古文書などから彼らの歴史を振り返り、今では実生活においても見ることが難しい、ありし日の生活用具や、衣装、織物などを紹介します。また近年の平埔族の動きにも注目します。

潘士萬家庭団欒図

さて、本展の目玉となる資料に移りましょう。時は 18 世紀、平埔族の人びとは漢民族の移民により、土地を奪われ、苦しい生活を強いられます。その漢民族移民の数、19 世紀の記録でおよそ 200 万人。一方、平埔族の人口はというと約 5 万人。その数の差は圧倒的で、平埔族の人びとの居場所がなくなるのも想像できるかと思います。

潘士興家庭団欒図

徐々に移民が増えていくなか、各平埔族グループが抵抗、反乱を起こしますが、一方で統治を素直に受け入れ、清朝政府に協力した平埔族グループもありました。そのグループ名はパゼッヘ (漢名：巴宰族) といいます。その首長であった潘家の一族は、清の皇帝の謁見（えっけん）を許され、台湾中部に広大な土地が与えられるなど、清朝の手厚い待遇を受けました。名前も“潘”の姓を清朝から与えられることとなりました。この二つの画像は、その時代の栄華を極めたパゼッヘの首長、潘敦仔（はんじゅくこう）の息子である長男・士萬（しまん）、次男・士興（しこう）の肖像画です。パゼッヘ伝統の衣装ではなく、漢服を身にまとっています。この肖像画はいずれも現在、台湾現地にはなく当館でしか見られない資料です。台湾の一地方のものとはいえ、貴重な歴史資料と言えるでしょう。 しかしながら栄枯盛衰は世の常、富を得た潘家も落日を迎えます。パゼッヘの人びとも自分たちの土地を失い、ついには移住を迫られることになるのです・・・この続きは展示室で！この他にも平埔族の人びとが時代とともに紡ぎ出したさまざまなものがたりをお楽しみ頂けたらと思います。

企画展講座

『台湾エスニックマイノリティーのいま
―台湾原住民族と平埔族―』

日時：11 月 16 日 (日) 午後 1 時 30 分～
講師：下村作次郎氏 (天理大学国際学部教授)
会場：研修室　　受講料：「関西文化の日」に伴い無料
定員：100 名 (当日先着順)

ギャラリートーク

日時：10 月 27 日 (月)、11 月 26 日 (水) 午後 1 時 30 分～
会場：3 階企画展示室

トーク・サンコーカン

「台湾平埔族パゼッヘ族旧首長の盛衰と台中平野の歴史 」
日時：10 月 25 日 (土)　午後 1 時 30 分～ (詳細は 4 頁に記載)

新春展「縄文時代の天理 ―出土品で見る布留遺跡の縄文文化―」

会期　2015 年1月5日（月）～3月2日（月）

布留遺跡出土の縄文土器

奈良県天理市にある布留遺跡は、今から 1 万年程前より人々の生活の場であったことが発掘調査で分かっています。この時代は縄文時代と呼ばれ、人々はこの時代を懸命に生き抜きました。さらに過酷な条件の中から生きる術（すべ）を見いだすために、様々な道具を考案し、作り、使ってきました。その証拠を遺物や遺構という形で現代に残していますが、まだまだ当時の全てを理解できるまでには至っていません。

今回の新春展では、長年に亘って行ってきた布留遺跡の発掘調査から縄文時代を取り上げ、モノや生活の場を通して見えてくる人々の生き方とその時代の文化を考えてみたいと思います。展示品は当時の全てを語りませんが、当時を知る一助になります。

1939 年に始まった布留遺跡の縄文時代の研究は、調査を重ねることで徐々にその様相が見えてきました。また、最初の調査地である布留（堂垣内（どうがいと））地区出土の土器は、縄文時代中期末から後期初頭の土器として天理式（天理 C 式）という名前が付けられ、今も学史に残る資料となっています。さらに、布留町に限らず豊井、三島、杣之内（そまのうち）の各町で行った調査においても大きな成果を収め、縄文時代の解明に一翼を担っています。

新春展ではこのような成果を踏まえ、今までの調査内容を披瀝（ひれき）したいと思います。展示の前半はその調査の足取りを辿り、後半はこれからの学史に残るであろう布留（堂垣内）地区と豊井（打破（うちわ））り）地区の様相を中心に、多くの出土資料とパネルや写真で、天理の縄文文化を紹介したいと思います。布留遺跡の縄文文化を知ることで、天理の歴史の一端を理解して頂ければ幸いです。多くのご来館をお待ち申し上げております。

記念講演会
「列島の狩猟採集民の知恵と技」
日時：1 月 24 日（土）午後 1 時 30 分～
講師：松田真一 特別顧問
会場：研修室
受講料：入館料のみで受講できます
定員：100 名（当日先着順）

ギャラリートーク
日時：1 月 26 日（月）午後 2 時 00 分～
　　2 月 26 日（木）午後 1 時 30 分～
会場：3 階企画展示室

ワークショップ
「チャレンジ！縄文土器を作ろう」
日時：2 月 14 日（土）
会場：研修室　募集人員：15 名
参加費：500 円　※事前申込みが必要です。

イスラエルにおける発掘調査（十四）

レヘシュ遺跡の調査は 2006 年から 2010 年にかけて、第 1 期として 6 次までの調査が実施されました。その後、2 年間の資料整理や報告書作成のための休止期間をおいて、2013 年には第 2 期として 7 次調査が行われました。

その間、ニュースレターでは日本の調査隊がレヘシュ遺跡の調査を始める以前に実施したエン・ゲヴ遺跡の調査成果についての紹介をしてきましたが、本号では、再びレヘシュ遺跡について説明したいと思います。

遺跡の全体の様子については、NO.5 でも説明しましたが、遺跡は南北を向く縦長の隅丸三角形を呈していて、2 段になっています。長さは約 350m、高さは約 35m の規模の大きなものです。北が最も幅が広く約 260m あります。その頂上部には 80m 四方の平坦面がありますが、この平坦面には石積みの壁が地表に顔を覗かせていて、ここに大型の建物があることが判明していました。その建物の一角を発掘調査しました。7 次の調査までに数部屋の建物を発掘しましたが、その結果、建物には石の階段が伴っていて、2 階があることや、石敷の庭が伴うことなどがあきらかとなりました（写真）。出土した遺物には、なべや壺、水さし、ランプ、コインなどがあります。これらの遺物から、建物は紀元前 1 世紀から紀元 2 世紀まで使われていたことがわかりました。このほか、部屋の壁面を飾っていたとみられるフレスコ画の断片も多数出土しており、建物は中庭の伴うフレスコ画で飾られた部屋をもつ公共的な性格のものであると推測されました。このほか、ユダヤ教の儀式に用いる石灰岩製の容器が出土していることから、ここにはユダヤ教の共同体の人々が居住していたという重要な事実も判明しました。（日野）

発掘されたローマ時代の建物跡

松田顧問の考古余話⑦　日中の考古学交流

ここ数年、日本と中国の関係は両国の政治的な思惑から、ぎくしゃくした状態が続いています。このように政治的に揉めることは好ましくありませんが、世界史的には国家が成立して以降、各地で隣国間の軋轢は頻繁に起こり、決して特別のことではありません。

さて考古学の世界ではどうでしょう。日中間では共同研究や文物の貸借など、近年両国の協力は益々促進されていますが、実はその先駆けがあるのです。日中国交回復の 15 年も前の 1957 年に、日本の考古学者の訪中団を中国が受け入れていました。政治に先んじて考古学の交流が開始されたのです。これはその前年に来日した郭末若中国科学院長の返礼とも言うべき格別の招聘によって実現したものです。原田淑人、水野清一、杉原荘介、関野雄など当時の名だたる考古学者が、各地の博物館や大学のほか、周口店など重要な遺跡を見学し、さらに講演会や座談会も開催するなど、約 50 日間にもわたって交流を深めています。北京では周恩来首相が自ら一行を歓迎した写真も残されています。

有史以来、彼我の文化交流は絶えることなく継続しています。歴史認識の違いを超えられる悠久の関係が両国の間には横たわっているのです。

資料紹介

ブタの音楽隊の人形

今年、ブラジルで開かれたサッカー W 杯。優勝したのはドイツでした。ドイツは世界有数のスポーツ大国ですが、おもちゃの生産地としても有名なのはご存知でしょうか。

ドイツのおもちゃ産業は、14 世紀頃に、林業や炭焼きを営む人々が、雪深い冬に内職としておもちゃ作りをしていたのがその始まりではないかといわれています。当時の職人は木彫り人形を作り、町から町へ売り歩いたそうです。その後もおもちゃ作りの技術は師匠から弟子へ受け継がれ、素朴ながらも精巧なおもちゃが生み出されていきます。

当館には 20 世紀前半にドイツで作られたおもちゃが多数収められています。今回、紹介するものは、ブタの音楽隊の人形です。フェルトで覆われた体の内部には、ゼンマイで動く仕掛けが隠されています。背部のネジを回すと、ブタがリズムよく太鼓を叩き始めます。そのとぼけた表情とコミカルな動きは、時代や国境を越えて、見るものを和ませてくれます。(梅谷)

ブタの音楽隊の人形

周辺の見所

内山永久寺跡

当館から山の辺の道に入り柳本方面へ 10 分ほど進むと、500m 四方の広大な敷地を有した内山永久寺跡に辿り着きます。ここは平安末期の永久 2 (1114) 年に創建された真言宗の寺院跡で、今年で創建 900 年を迎えました。それを記念して天理市では講演会や現地ウォークなど様々な催し物が企画されています。

内山永久寺は鳥羽天皇の勅願で建立されたことが知られ、仏教文化を背景にもつ山荘的性格をもった上級貴族との交流の場であったようです。それを物語るかのように境内地には、今は無き真言堂、多宝塔、本堂や庭園など 40 以上の堂塔が建ち並び、その威容を誇っていました。

歴史は流れ、かつて「西の日光」とよばれる程の美観を見せた大寺は、明治政府による廃仏毀釈で悉く破壊され、遺跡の面影は境内地に残る本堂池でしか見ることができなくなりました。しかし、移築によって難を逃れた建物もあり、石上神宮境内地にある国宝「摂社出雲武雄神社拝殿」は、その数少ない建物の一つです。移築建造物はこの他にもあるようなので、探しに行くことで往時の姿を偲ぶことが出来るかもしれません。(太田)

当時の面影を残す本堂池

公開講演会トーク・サンコーカン

◇いずれも午後 1 時 30 分開講
◇会　場：研修室
◇受講料：無料（ただし入館料が必要）
◇定　員：100 名（申込不要）

第 231 回『東大寺山古墳の謎を語る』
9 月 27 日 (土)　講師 / 藤原 郁代 学芸員

天理市の北東部、奈良盆地を見渡す丘陵上に東大寺山古墳はあります。この古墳からは、古墳の年代を 100 年も遡る中国漢代の年号を書いた刀が出土しています。誰がいつ刀を漢から貰ったのでしょう？なぜ 100 年後に東大寺山古墳に納められたのでしょう？東大寺山古墳にはほかにも多くの謎があります。ひとつずつ見ていきます。

第 232 回『台湾平埔（へいほ）族パゼッヘ族旧首長の盛衰と台中平野の歴史』
10 月 25 日 (土)　講師 / 早坂 文吉 学芸員

台湾平埔族の一グループ、パゼッヘ族は早期に清朝政府の台湾支配を受け入れることで、台中平野の開拓に貢献し、清朝より様々な恩賜を受けました。今回の講演ではパゼッヘ族の旧首長である潘氏一族にスポットを当て、肖像画や古文書などから潘氏の盛衰を見ていきます。また彼らパゼッヘ族と大陸から移民してきた漢民族との関係を理解し、18 ～ 19 世紀の台湾の一地方史をのぞいてみたいと思います。

第 233 回『古墳時代の豪族居館を考える』
11 月 22 日 (土)　講師 / 日野 宏 学芸員

古墳時代、弥生時代以来の環濠集落は解体し、首長は一般民衆とは隔絶した場所に方形の居館をつくるようになります。古墳時代中期には群馬県三ツ寺 I 遺跡のように周囲を石垣で囲った、一辺 90m 近い大型の居館も出現します。こうした豪族居館からヤマト王権を支えた中央の豪族や在地首長の実態に迫りたいと思います。

第 234 回『布留遺跡縄文時代の調査 ―ここまでわかった縄文時代の天理―』
2 月 28 日 (土)　講師 / 太田 三喜 学芸員

奈良県天理市に所在する布留遺跡は、古墳時代に最も栄えた遺跡として著名です。しかし人々の営みは、それより 9000 年前の縄文時代早期からあったことが発掘調査で分かっています。布留遺跡の人々は過酷な時代を生き抜くために、様々な道具を考え、作り、使ってきました。その証拠を遺物や遺構という形で現代に残しています。今回は新春展に合わせた内容を中心に、布留遺跡における縄文時代の調査成果を紹介します。

第 235 回『貨幣で世界を眺めてみよう』
3 月 14 日 (土)　講師 / 梅谷 昭範 学芸員

世界の様々なお札や硬貨を眺めてみると、その国の政治、経済、歴史、文化などあらゆる側面が如実に浮かび上がってきます。激動する現代社会において、貨幣は時代を映す鏡のような存在といえるでしょう。

今回のトーク・サンコーカンでは、当館が収蔵する貨幣資料を教材にして、そのデザインに込められた意味を読み解いていきたいと思います。

ワークショップ　参加者募集！

「チャレンジ！・縄文土器を作ろう」
○実施日 / 2 月 14 日 (土) 午後 1 時 30 分～
○参加費 /500 円　○募集人員 /15 名 (要事前申込)

11 月 15(土)・16(日) は
「関西文化の日」に伴い入館無料です！
ぜひ、ご来館ください♪

編集後記

先日、館のシンボルツリーである「あべまき」を植木職人さんが剪定していました。高さ 20 m以上はある大木に登り、余分な枝を落としていく職人技に一同唖然。少しすっきりした (!?) シンボルツリーが皆様をお出迎えいたします。(Y)

世界の生活文化と考古美術の博物館
天理大学附属
天理参考館
TENRI UNIVERSITY SANKOKAN MUSEUM

住所：〒 632-8540　奈良県天理市守目堂町 250
TEL：0743-63-8414　FAX：0743-63-7721
URL：http://www.sankokan.jp/
携帯電話のサイトから情報をご覧頂けます

開館時間：午前 9 時 30 分～午後 4 時 30 分 (入館は午後 4 時まで)
入館料：大人 400 円／団体 (20 名以上)300 円
小・中学生 200 円 (学校単位の団体は無料・事前申し込みが必要)